



# ちょっとそこまで～お散歩日和(名言編)～



## 死。… ハクスリー



死…。

これだけは、いまだに完全に

卑俗なものにすることができない。…… オルダス・ハクスリー

これは、1932年に発表された「素晴らしい新世界」と題する、アンチ・ユートピアの立場で書かれたSF小説の一節です。ジョージ・オーウェルの「1984」と並ぶ傑作とされていますが、あまりに書かれていることが極端すぎるために、リアルでありながら可笑しみに満ちた作品です。

例えば、2049年の世界では、イエス・キリストに代わって、自動車王フォードが神として崇められ、西暦に代わってT型フォードが発売された1908年を元年とした「フォード紀元」が採用されていると言った具合です。胸で十字を切る代わりに、T型フォードにあやかってT字を切るという徹底ぶりにはどうしたって笑いが先に来てしまいます。

しかし、その一方で、今読んでも、その科学的な視点は先見的であり、資本主義と効率化の行き過ぎに警鐘を鳴らしている姿勢と、今流行りのSDGsの発想を十分に予見している点は、極めて現実的と言えるのではないのでしょうか。一部を列記しただけでも、その先見性には目を見張ると思います。最近、原題の「ブレイブ・ニュー・ワールド」でTVシリーズ化されましたから、一度ご覧になると良いでしょう。

- ・ 遺伝子による選別と人間の工場生産……クローン技術、出生前診断、少子化問題
- ・ 快楽薬ソーマの配給……うつ病の拡大と治療薬プロザックの問題
- ・ 受精卵から培養ビンで製造……結婚観の変容、家族の解体
- ・ 知的格差を用いた階級化……経済格差と知的格差の相関
- ・ 触感映画、芳香オルガン……バーチャル・リアリティの浸透
- ・ 文学や自然観照の衰退……消費を生まない資本主義は意味がない



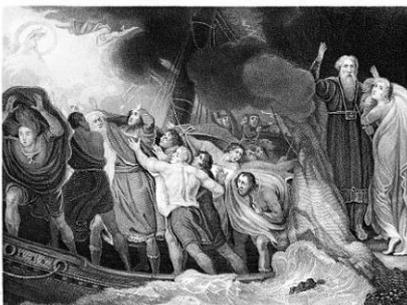
※観照とは、「対象の本質を客観的に冷静にみつめること」「美を直接的に認識すること」の意味

なお、作品のタイトルは、シェイクスピアの「テンペスト」に登場するミランダの台詞「O brave new world」からの引用であり、オマージュです。この台詞については、もう少し触れておきましょう。

O wonder! How many goody creatures are there here! How beautiful mankind is!

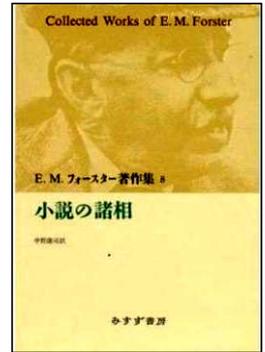
O brave new world, That has such people in it!

(意味) まあ、不思議！ここにはなんて多くの素敵な人たちがいることでしょう！人間はなんて美しいのでしょうか！ああ、素晴らしい新世界、こんなに人がいるなんて。



孤島で一人育った、プロスペローの娘ミランダが、大嵐の後で初めて人間に出会った時の言葉です。「テンペスト」はシェイクスピアの最後の作品とされています。「あらし」のタイトルで知っている人も多かもしれません。ちなみに、stormは、暴風雨や雷雨、大雪の天候など、嵐そのもの以外にも悪天候であればその情景描写のために使われます。一方、tempestは、stormよりも物語に使われるような文学的な表現で、stormと比べてもっと悲惨な大嵐のことを指します。

ところで、E・M・フォースターが、「小説の諸相」の中で、「プロット」と「ストーリー」の相違について、次のように触れています。



プロットの意味を明らかにしよう。ストーリーは、時間の順に配列された出来事の叙述であると定義した。プロットも出来事を語ったものではあるが、因果関係に重点が置かれる。

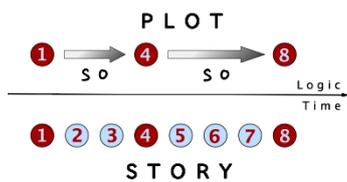
- ・「王が死に、それから女王が死んだ。」というのは、ストーリーである。
- ・「王が死に、悲しみのあまり女王が死んだ。」というのは、プロットである。

この場合、時間の連続性は保たれているが、因果の意味合いが影を投げかけている。さらに、

- ・「女王が死んだ。その理由を知る者は誰もいなかったが、やがてそれは王の死に対する悲しみのゆえであったとわかった」というのは、ミステリーを含んだプロットで、高度の発展の可能性を秘めた形態である。

ここでは時間が一時停止し、限界の許すかぎりストーリーからかけ離れている。女王の死に関して言えば、私たちはストーリーならば「それから？」と尋ね、プロットならば「なぜ？」と問う。小説の2つの様相であるストーリーとプロットとの根本的な違いは、ここにあるのだ。

引用は以上です。要するに、ストーリーは前後関係の表現であり、プロットは因果関係の表現であるということです。換言すれば、ストーリーが流れに沿って進んでいく物語や話のことであるのに対して、プロットはそれを「何が起るか」「どうなるか」という観点で組み直した、計画的なイメージ・構想ということになります。



その視点で、冒頭に触れる「死」について考えると、死の二面性に気付きます。つまり、ストーリーとしての肉体の死と、プロットとしての記憶の死です。

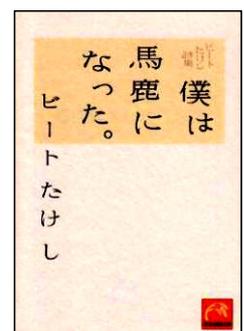
人の生涯には、境遇を問わず、さまざまな希望があり挫折があります。人名事典風に記述すれば、そのストーリーは一見何事もない平凡な生涯でも、現実の生涯はそんなものではありません。1人の人間にとっては、一つ一つの出会いや別れにも忘れがたい喜びや悔恨の記憶があり、その背後には、個人の力ではどうにもならなかった時代の風景が広がっています。そのプロットは、解釈一つで無限の広がりを見せてくれる要素に満ちていることでしょう。

また、人生とは、ある意味で記憶の中で生きているものです。日頃は思い出す暇もない、そうした記憶を、私たちはその人の死をきっかけにして思い出します。彼と仲が良かったか悪かったかも、問題ではありません。たとえ生涯の敵同士であったとしても、全く出会うことのなかった無数の人たちと比べれば、はるかに影響は大きく縁が深かったと言えるからです。そう考えれば、生きている間も、それほど憎しみ合うことではないのかもしれませんが。やがては死が、敵も味方も平等に片付けてくれるのですから。いや、そうではなく、敵も味方もない人生は、味気ないものです。だからこそ、さまざまな感情全てをひっくるめて生きていくことが大事なのです。なかなかそこまで達観は出来ませんが…。

そこで、最後に、ビートたけしの「僕は馬鹿になった。」という詩集から「騙されるな」を紹介します。

人は何か一つくらい誇れるものを持っている  
何でもいい、それを見付けなさい  
勉強が駄目だったら、運動がある  
両方駄目だったら、君には優しさがある  
夢をもて、目的をもて、やれば出来る

こんな言葉に騙されるな、何もなくてもいいんだ  
人は生まれて、生きて、死ぬ。  
これだけでたいしたもんだ



(終)